屋久島のシママワリ

小嶋博巳

一

島を一巡するかたちで巡礼のコースが設定されているという例は、およそ枚挙に暇がない。小豆島や伊予大島、笠岡の神島などの八十八カ所はその代表と目してよいであろうが、そうした本格的なものばかりでなく、小さな石仏を所定の数だけ設置したようなものも含めれば、瀬戸内海などは人の住む島でこれをもたない島の方がむしろ珍しいと言ってよいであろう。似たような状況は、程度の差こそあれ他の島嶼部、たとえば北九州の島々などでもみられるところである。

こうした島々の巡礼霊場の成立は、近世にピークを迎えるうつし霊場の全国的なブーム[1]、つまり西国三十三カ所や四国八十八カ所を小型化して地元へ勧請しようとする機運によるものと理解できよう。瀬戸内に限っていえば、特に四国遍路の強い影響のもとに、近世後期を中心に勧請が流行的に進行したことが想像される。

ただ、これらの島々の巡礼の習俗をも単純に西国巡礼や四国遍路の模倣としてよいかというと、そこには検討すべき問題があるように思う。というのは、島嶼部、ことに本土の仏教文化の影響が相対的に小さかったと思われる離島には、〇〇三十三カ所や〇〇島四国の巡拝というかたちではないめぐりの習俗をもつ例がいくつか知られており、そもそも島嶼にはその内部を一巡するという儀礼行動の様式が広く存在したのではないかと思われるからである。たとえば八丈島には、ヒガシマイリとかシマメグリと称して聖地をたどって島を一巡してくる巡拝の習俗があり、不幸や病気が続いて家内がおもしろくないときに巫女の指示でまわるとか、特定の日にまわると報告されている[2]。また対馬には、少年たちが（おそらく、なにほどか成年儀礼的な意味合いをもって）近隣の村々を経めぐるナナウラマイリ（七浦詣り）という習俗があり、また島めぐりの風習もあったという[3]。南西諸島の各地にも類似の習俗はあるらしく、沖縄本島のアガリウマーイ（東御参り）[4]なども、これと一連の文化であろう。

残念ながら、アガリウマーイなどを除けば、こうした島のめぐりの習俗についての立ち入った報告は少なく、これらの習俗の実態や分布を通観できる状況にはない。そこで小稿では、一つの事例としてかつて屋久島（鹿児島県熊毛郡上屋久町・屋久町）で行なわれていたシママワリについて報告し、こうした問題への接近のきっかけとしてみたいと思う。以下は一九九五年三月の筆者の調査によるものである[5]。

二

屋久島は一周約一〇〇キロメートル、島の大部分は主峰・宮之浦岳を中心とする深い山々によって占められ、外周部に二三（現行の行政地名は一七）の集落が点在する（図1）。シママワリは、その海沿いの各集落をつなぐ経路により、三日ないし五日を費やして島を一巡する習俗である。これは、もとはニセと呼ばれる若者組に属する青年た

ちを中心に行なうものであったらしいが、一九二〇年代（大正末年から昭和初年）には小学校の高学年の行事に取り入れられ、青年の行事としてはむしろ衰退していったようである。[6] もっとも、学校行事としてのシママワリも、戦後の高度成長期に島外（鹿児島市など）への修学旅行が取って代わり、現在では行なわれていない。筆者は、上屋久町の小瀬田・一湊・永田および屋久町の尾之間・湯泊の五集落で、七〇～八〇歳代の話者一〇人に体験を聞くことができたが、このうちニセでシママワリを経験していたのは比較的年長の男性二人のみで、多くは小学校（尋常小学校）の行事でこれを経験していた。

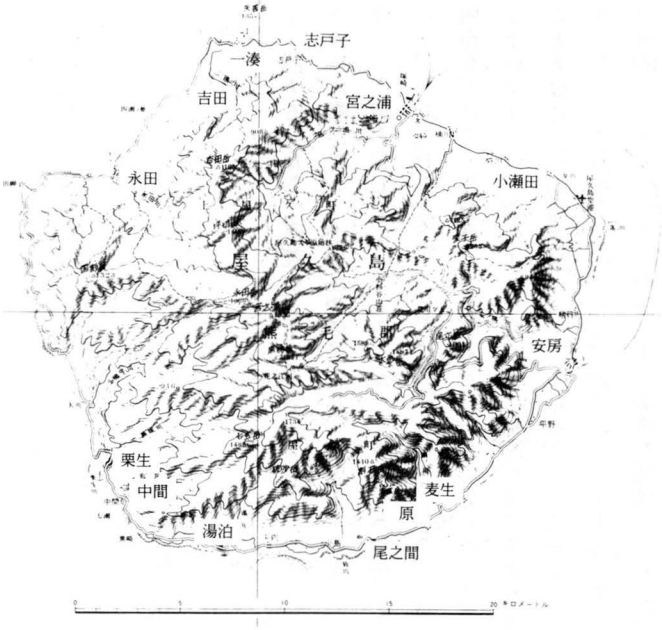

図1　屋久島全図（1／200,000地勢図「屋久島」より）

まず、代表的な事例を二例あげて、シママワリの概略を示してみたい。

屋久町湯泊の小野栄彦氏（一九〇七年＝明治四〇＝生まれ）は、ニセのシママワリの体験を聞くことのできた二人の話者のうちの一人である。この男性の場合、二〇歳前後に数回、ニセ十数人でシママワリをしている。当時、湯泊の少年たちは小学校を出ると一四歳前後でニセ（セーネン＝青年＝ともいう）に加入、三〇歳前後までこれに属す慣行で、湯泊には常時二十数名のニセがいた。シママワリは毎年あったわけではないが、誰かが島をまわってみようと言い出すと自然に相談がまとまり、都合のつく者が集まってシママワリに出た。ときには青年ばかりでなく娘が交じることもあり、それもまた楽しみだったという。季節はおもに夜具が少なくてすむ夏で、着物に草履または足半、番傘を背負うという出で立ちであった（屋久島は「ひと月三五日雨が降る」と言われるほどの多雨地帯である）。屋久島のほぼ南端に位置する湯泊からまず西隣の中間部落へ向かい、ついで栗生、永田、吉田と、右まわり（時計まわり）に島を一周した。宿泊地は島の西北の永田部落と北部の志戸子部落の二か所で、二泊三日であった。西南の栗生と西北の永田のあいだは深い山が島の西海岸に迫り、集落はなく、道も整備されていないシママワリの難所であったが、この間は六里の岳越え（山越え）をすることも、またスソ道と呼ばれる海沿いの隘路（これも平坦ではない）を利用することもあった。宿泊先は一行のうちの誰かの知人宅で、みなでごろ寝をした。そこには土地のセーネン

たちも集まり、にぎやかに酒盛りをして、歌い踊って楽しんだものだという。シママワリをしていないと一人前でないとか、嫁に行けないなどと言うことはなかったらしいが、小野氏の世代では、島で青年時代を送った者は例外なくシママワリを経験していると言ってよいようである。

上屋久町小瀬田の新田時雄氏（一九一三年＝大正二＝生まれ）は、小学校五年生のときに学校の行事でシママワリをした。五、六月の気候の良いころで、五、六年生あわせて十数人（女子を含む）を先生が引率してまわった。当時は洋服はまだ少なく、多くは絣の着物にわらじ履きで、予備のわらじを肩に担ぎ、さなだひもで番傘を背負って歩いた。一日目は尾之間、二日目は栗生で泊まって、三日目に六里の山越えをして永田泊り、四日目に小瀬田に帰ってきた。もちろん、現在のような整備された道ではなく、人ひとりがやっと通れるような二尺足らずの道が多かった。宿は、それぞれ別個にシマイトコと称する親の知人宅に世話になり、一行がいっしょに泊まるわけではなかった。泊まりの部落に着くと、それぞれのシマイトコが学校まで迎えに来ており、「〇〇が（の）息子は来ちょらんか」と口々に呼び出して家に連れて行ってくれた。事前に親が手紙でシママワリのことを知らせており、学校からも宿泊先の地区の学校に連絡が行っていたらしい。宿では御馳走を出して歓待してくれ、翌日は弁当に握り飯を持たせてくれた。こうしたシマイトコはほとんどの部落にもあったが、泊まる部落にシマイトコがない子どもは級友のシマイトコの家にいっしょに世話になった。一湊の、一隻の漁船がひと朝に何千尾もの鯖を水揚げする港の活気や、尾之間の温泉の湯煙が子供心に印象深かったという。

三

以上の二例の体験談を他の話者の話で補いつつ、この慣行の全体像を追ってみたい。

まず日程であるが、青年の場合には二泊三日でめぐることも可能だったが、学校行事のシママワリでは、体力の問題もあり、三泊ないし四泊かけてまわっている例が多い。たとえば島の東端に近い小瀬田の場合、尾之間（南）、栗生（南西）、永田（北西）と三泊している。北端の一湊からは、安房（あんぼう）（南東）、栗生（南西）、永田（北西）と泊まった。永田からは、宮之浦（北東）、安房（南東）、尾之間（南）、栗生（南西）と四泊であったといい、湯泊では、小学生の場合は栗生（南西）、永田（北西）、一湊（北）、宮之浦（北東）、安房（南東）と五泊することもあり、高等科の生徒になるともう少し足が丈夫になるので宿泊地を減らしたという。いずれの場合も栗生と永田が宿泊地に含まれているのは、前述のようにこの間が「上り三里、下り三里」といわれる難所だからで、岳越えにしてもスソ道をまわるにしても、その前後に宿泊が必要だったからである。

興味深いのは、右に示した例からもわかるように、いずれの集落でもシママワリは右まわりの経路をとっていたことである。北部の一湊や永田などではこのまわり方をヒガシマワリと呼び、東部の小瀬田ではシモママワリと呼んでいる。左まわりで行なう例がまったくなかったわけではないが、筆者が聞きえた一〇人の話者の計一〇余例の実例は

いずれも右まわりで行なわれており、なかにはシママワリを逆まわり（つまり左まわり）でやることはない、と断言する話者もいた。シママワリの原則は右まわりであるとみてよかろう。[7] その理由は、栗生・永田間の山越えがこの経路の方が容易だから、と説明されることもあるが、西国巡礼・四国遍路をはじめとして日本の巡礼は基本的に右まわりに順路を設定すること、八丈島など他の島にも時計まわりにめぐる習俗があることも思い合わせるならば、より本質的な理由は別のところにあると考えるべきであろう。[8]

次に、シママワリの宗教的性格はどうであろうか。

屋久島のシママワリが島四国巡礼などと大きく異なるのは、聖地巡拝という意味付けがきわめて希薄な点である。多くの話者は道中で主だった集落の村氏神に参った記憶があるといい（その記憶はないという話者もいる）、特に昭和期（戦前）の学校行事では、時代を反映して神社巡拝がかならず組み込まれていたようであるが、経験者たちには、それがシママワリの目的であったという認識はまったくうかがえない。もとより、シママワリでかならず参らなければならない聖地があるわけでもない。シママワリがシママワリたりうるのはあくまで屋久島（の全集落）を一巡して来ることによってであって、神社巡拝は付随的な要素と言ってよい。ある話者は、一九六七年に栗生と永田を結ぶ西部林道が開通し、島を一周する道路が整備されてまもなく、高校生の息子が数人の友人と自転車でシママワリをした話をしてくれたが、こうした行動もシママワリと呼ばれるのである。

もっとも、第二次大戦中には、「武運長久」祈願のため、出征兵士の家族がシママワリをすることがあり、その場合には各集落の氏神社へ詣でることが目的とされていた。戦後には願ほどきのシママワリを行なう風もあった。さらに『屋久島記』なる古記録[9]（享和三年＝一八〇三＝没の毛利正直の著述とする伝があるという）には、「年毎に宿願の子細ある者は男女限らず、島巡ということ企て、此には神社仏閣を残らず拝みたり」とあって、願掛けの巡拝としてシママワリが行なわれたことがみえる。ただ、さきのような屋久島の人びとの感覚を聞くかぎりでは、これらは、祈願の方法としてシママワリという形式が採用されることもあった、と理解すべきかと思う。『屋久島記』は、前記の部分に続けて、「序ながらの道草に名所旧跡を数ふること伊勢参宮の趣に似たり。泊り泊りは知音の方に足を休め、初て面を合せる人をも従兄弟と唱て、ひたすらの饗応に夜もすがら謡ひ明す」としており、「宿願の子細」や神社仏閣の巡拝には、シママワリするための名目といった面があったこともうかがわせている。

宗教的性格が希薄であることと関連しようが、ある種の社寺参詣にみられるような儀礼的な行動様式も、ここではあまり顕著ではない。出立の儀礼などはほとんど確認できない。ただ、一湊では、帰還すると家で御馳走をして祝ってくれたといい、これをマチムケエ（待ち迎えぁ）と呼んでいた。ちなみに、一湊あたりでは普段はカライモの飯に塩鯖のカテ（菜）の食事が、このときは白いご飯に里芋の煮付け、うどん、団子になったという。

結局、シママワリの目的としてほとんどすべての経験者が第一にあげるのは、「島を知る」ことである。屋久島は集落間の距離が大きく、

個々の集落の孤立性が相対的に高い。したがって、小学生はもちろん、ニセに属する青年たちも、多くはこの行事によってはじめて他集落を訪れ、島の全貌を直接知る機会を得ることになる。たとえば、小瀬田のような農業地区の若者は、一湊の漁港の活気あふれる水揚げ風景や鯖節製造場・製氷所などの施設に感嘆し、逆に一湊の少年たちはシモ（屋久島の南部地方）の水田をめずらしくながめ、畑のサトウキビを折ってかじる体験に歓声をあげたという。栗生からの岳越えで通過する大川（おおこう）の滝、永田や一湊の灯台、志戸子のガジュマルの密林など、屋久島の名所を見物することも欠かせない要素であった。さらに何人もの経験者が指摘するのは集落ごとの言葉の違いや人の顔つきの微妙な差異で、某部落の言葉は荒いとか、どこそこはナツイ（やさしい）といった評価をシママワリで実感するのだという。また、ニセたちのシママワリの場合には、他集落のニセと交流をもつことと同時に、よそのヨメジョ、つまり娘たちを見ることも大きな楽しみでもあったらしい。具体的な事例は確認できなかったが、これが縁で好い仲になったり、婚姻に至ることもありえたと聞く。

シママワリに関連して言及しておかなければならないのは、この島のシマイトコの慣行である。さきの体験談にも登場したが、シマイトコとは、特定の親密な交友関係――親戚同様の、あるいは親戚以上の、と表現される――を結んだ他集落の住人をさすものと理解される。単にイトコということも、またヤクシマイトコということもあり、集落によってはキョウダイともいう（志戸子など）。

この交友関係のもっとも重要な機能は、交通手段の発達していなかった時代に、何らかの必要があって遠方の集落に出かけた際、身を寄せる家を確保することにあったらしい。つまり、漁や山林伐採の仕事で、あるいはかつて盛んであった村単位・島単位の運動会・競技会などの行事で遠方へでかけた折には、そこのシマイトコの家に宿をもらい、もてなしを受ける、また先方がやってきた場合には同様に歓待する、という相互扶助的な役割がこの関係には期待されていた。そして、シママワリもこれが機能する重要な機会であって、シママワリに出る青年や少年たちは、親から、栗生へ行ったら誰々の家へ行け、一湊ではどこそこへ、と親たちのシマイトコを教えられ、そこでおおいに歓待を受けたのである。したがって、自動車が普及し、島の道路が整備されて島内での移動が日帰りで十分可能になると、このつきあい慣行はその必要性を一挙に減じ、急速に衰えたと言われている。

シマイトコの関係を結ぶきっかけはさまざまであるという。かつてトビウオ漁が盛んであった頃には栗生をはじめ島の南部が主要な拠点となり、四、五月の漁期に上屋久町方面から出漁した漁師がそこでシマイトコを得たという話を数例聞いた。また、鹿児島の病院で同室だったことが縁でつき合いを始めた、湯治先でいっしょになりシマイトコになった、というようなことも珍しくないという。[10] このように、ちょっとした出会い（ミシリアイ＝見知り合い＝という）がきっかけで交友が始まったようなケースを、とくにミシリイトコというようである。一方、ムカシイトコという言葉もあり、父や祖父にさかのぼる代々のシマイトコをこう呼んでいる。シマイトコの関係は親から子へ継承されることも少なくなかったことがうかがえる。青少年のシママワリの

慣行が、この次世代への継承に大きくあずかったことは想像に難くない。

もちろん、シママワリを機に、まったく新しくシマイトコ関係が生まれることも多かった。ニセのシママワリでは土地のニセとの交歓のなかで多くの知人をつくり、シマイトコに発展したというし、同行者のシマイトコ宅に世話になった者があらたにシマイトコになること、道中で顔の似た者と出会い、シマイトコの約束をすることなどは珍しくなかったという。[11] シママワリは、シマイトコ関係が機能し、強化される機会であると同時に、これを再生産する機会でもあったと言えよう。[12]

四

屋久島のシママワリにとって、シマイトコというつきあい慣行との関係は注意すべき重要な側面であろう。また、これが島の神々の巡拝として行なわれていた事実も無視してよいわけではなかろう。しかし、なによりも興味深いのは、この慣行の目的ないし効用について、「屋久島に生まれて島を知らなくてはいかん」「屋久島がどうなっているか知らねば」「島のどこに何があるか知る必要がある」等々、経験者たちが異口同音に「島を知る」ことを強調していることである。やや大袈裟に言えば、自己の属す空間の全体像を把握したいという願望、いわば世界認識の願望によって行為が動機づけられている事実が、ここには率直に語られていると言えよう。岩田慶治は、人間の基本的欲求（ベーシック・ニーズ）に還元できない「もう一つの願望」の一種に「足もとを確かめたいという願い」をあげて、対馬の七浦詣りや島巡り、さらにスリランカの巡礼に触れたことがあるが、[13] 屋久島のシママワリは、「めぐる」という行動様式の背後にある根源的な欲求のひとつを、かなり直截に語りつづけてきた事例ではないかと考える。

註

（1）新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、一九八三年、一一一二―一一三〇頁。

（2）柳田国男『分類祭祀習俗語彙』角川書店、一九六三年、三四五頁。直江広治・古家信平「東京都の民間療法」直江ほか『関東の民間療法』明玄書房、一九七六年、二二七頁。

（3）酒井卯作『琉球列島における死霊祭祀の構造』第一書房、一九八七年、五七四―五八〇頁。

（4）岩田慶治『創造人類学入門』小学館、一九八二年、五四―五六頁。同「生と死の構図」石川栄吉ほか編『生と死の人類学』講談社、一九八五年、八頁。

（5）屋久島のシママワリ習俗について知ったのは、田中宣一氏（成城大学）のご教示による。また、調査に入るにあたり、氏からは多くの予備知識を授けていただいた。なお、管見の範囲では、この習俗については従来まとまった記述はなかったようであるが、現在刊行中の、屋久町郷土誌編さん委員会編『屋久町郷土誌』（第一巻・村落誌上、屋久町教育委員会、一九九三年。第二巻・村落誌中、同、一九九五年。第三巻は未刊）が集落ごとに体験をまとめており、有益である。

（6）ニセのシママワリと学校行事のそれとの関係、およびそれぞれの終息時期は、一〇人の話者の情報を総合した筆者の認識である。集落によって多少の違いはみられるようである。

（7）『屋久町郷土誌』（前掲註5）に集められた実例をみても、まわり方が明らかな三〇余例のうち、左まわりは三例にすぎない（なお、同書では「右回り」とすべきところを何か所か「左回り」と誤記している）。また、島の東北部に位置する楠川では、島内一周（シママワリ）は時計まわりに下の方からまわるもので、上から行くと上の者に失礼になるといっていたという（柏木亜弓「社会生活・産育」下野敏見編『上屋久町の民俗』上屋久町教育委員会、一九九二年、六八頁）。

（8）日本の巡礼の右まわりの様式は仏教の右遶の儀礼にもとづくもの、という意味の説明が行なわれることがある。しかし、西国巡礼や四国遍路はともかく、屋久島のシママワリをはじめとする島のめぐりの習俗をこれで説明することはむずかしい。筆者は、むしろ、近畿地方周辺で行なわれていたヒノトモ（日の伴）、ヒムカエ・ヒオクリ（日迎え・日送り）などと呼ばれる習俗にヒントがあるのではないかと考えている。これは春秋の彼岸の行事で、午前中は太陽を迎えるように東に、午後は太陽を追って西に歩くとされるが、報告のなかには日の出を迎えたのちに南をまわって西の方へ行き、日の入りを送って帰って来る、としているものもあり（京都府中郡。柳田国男編『歳時習俗語彙』民間伝承の会、一九三九年、三九一頁）、結果的に太陽の運行を追って右まわりに近いかたちで周遊することになるようである。北半球では太陽の運行は（時計の針の進み方がそこに由来するように）右まわりと認識されるが、あるいは仏教の右遶も含め、右まわりの儀礼行動の起源はこのあたりに想定してよいのではなかろうか。

（9）山本秀雄翻刻『屋久島記』自刊、一九八四年。

（10）このほか『屋久町郷土誌』（前掲註5）には、林業関係の仕事や、行商、大工、鰹節製造見習い等々で他集落に出かけたのを機に、また軍隊でいっしょになったのが縁で、といった例があげられている。

（11）一般に、シマイトコになろうという約束をイトコナノリというが、こういうきっかけでシマイトコの約束をするのをカオナノリともいうらしい（下野敏見編『屋久町の民俗』屋久町教育委員会、一九八八年、六六頁）。

（12）シマイトコに関する筆者の把握はきわめて不十分であるが、知りえた範囲で若干の補足をしておく。この関係は基本的に個人対個人のもので、男性に限らず、女性同士がシマイトコの縁を結ぶことも珍しいことではなかった。一人の人間が平均して何人ぐらいのシマイトコをもっていたかは明言できないが、シママワリに関してしばしば「どこの部落にもシマイトコがあった」という表現を聞く。もっとも、この慣行の機能からいって、ごく近隣の集落にシマイトコをもつことは一般的ではなかったようである。シマイトコ間では贈答も盛んであった。小瀬田の某家の場合、漁村である一湊・志戸子のシマイトコからは、毎年、魚（鯖の干物、塩辛、あるいは無塩の魚）が贈られ、こちらからは莚や手ぼうきを作って贈っていたという。贈答品はそれぞれ集落の特産というべきもの、特に先方では自給できないものが選ばれて贈られることが多かったようである。安房・麦生・原などは黒糖、永田あたりは蜜柑がよく使われたという。

（13）岩田慶治『創造人類学入門』（前掲註4）、五〇―六〇頁。